國學院大學学術情報リポジトリ

〔談話室〕唐詩私解

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 伊藤, 陽平, Ito, Yohei メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000305

唐詩私解

高山節也

談話室に投稿せよとのことでふさわしい文章を考えてみたが、以前ものしたまま発表する機会もなく、埋もれていた詩解を思い出した。誠に短い、しかも唐詩には素人の私が勝手気ままに書いた文章ではあるが、一方で捨てがたい気分もあり、恥を忍んでお目にかける事とした次第。大方の御寛恕を請います。

涼州詞　王之渙
黄河遠上白雲間
一片孤城万仞山
羌笛何須怨楊柳
春光不度玉門関
（全唐詩二五三）

涼州詞
黄河遠く上る白雲の間
一片の孤城万仞の山
羌笛何ぞ須ひん楊柳を怨むを
春光度らず玉門関

【通釈】黄河の上流　遠く遡る白雲生じるあたり　そびえ立つ山中の　取り残された城塞一つ　羌笛よ　別れの怨みをこれ以上かき立ててくれるな　玉門関のその先には　春の光も及ばないのだ

【作者】盛唐。六八八〜七四二年。字は季陵、山西并州の人。若くして詩才があったが、殆どが散佚した。

【鑑賞・解説】
涼州は現在の甘粛省武威付近。この地で採集された楽曲、それに付された詩などを、涼州詞・涼州詩という。辺境の守備にむかう兵士の心境を歌うのも、重要な詩題である。ジャンルとして万葉集の防人の歌などと共通するものがあるかもしれない。

詩中の「黄河遠上」を「黄沙直上」とするテキストがある。これは黄河が玉門関とはあまりに遠く隔たっていることと思い合わせて、黄砂を巻き上げる竜巻をこれから向かう風土に想像したとする設定であろう。いかにも合理的な解釈のなりたつ異文であるが、詩想の飛躍など、一つの修辞として黄河を捉えれば問題はなさそうである。

本作品のもつ情景には凄惨なものがある。「一片孤城万仞山」は任地の人界から隔絶した状態を歌い、「春光不度玉門関」は任地の酷烈な自然風土を歌っている。そうした孤城にむかう自分には、生還の保証すらなく、それを「怨」の一

字に集約しているのであろう。これは悲哀とか孤独とかいう世界とは次元の違う、より生々しい闘争の場とつながっている怨念である。この時代、反戦思想や世界平和のアピールなどなく、行けといわれれば行くしかない人間の、どうにも閉塞した感情が歌われているのである。

ただ、全体を通読しあるいは朗読してみるとき、そうしたドロドロした怨念を、なにがしか緩和するものが感じられる。白雲や春光のもつ本来的温和の気が、別世界の厳しい風土を暗示しながら、そこに一種の救いを与えていること、さらに羌笛の響きに哀愁を思うことにも、観察者としての作者の精神的余裕さえ感じられる。一兵士の死に直面した状況を、詩として客観化しようとするとき、必然的に現れる詩人の目線がそこにはあるのであろう。

蘇台覧古

旧苑荒台楊柳新たなり
菱歌清唱春に勝へず
只今惟有り西江の月
曽て照らす呉王宮裏の人

蘇台覧古　李白

旧苑荒台楊柳新
菱歌清唱不勝春
只今惟有西江月
曽照呉王宮裏人

（全唐詩一八一）

【通釈】古い庭園荒れた高殿　そこにも柳は芽吹きそめた　菱をとる娘等の歌声は　春の愁いをいや増すばかり
今はただ西江に照る月影も　かつては呉宮の　美女を映したものを

【作者】盛唐。七〇一～七六二年。西域の出身といわれる。字は太白、号は青蓮居士。宮廷詩人として名声を得るが続かず、最後は酔って水中の月を取ろうとし、溺死したとの伝説がある。

【鑑賞・解説】「蘇台」は姑蘇台のことで、呉王の闔廬と夫差の二代にわたって立てられた宮殿の跡。「菱歌」は菱の実摘みのとき歌われる労働歌であるというが、その実態は不明。ただ「清唱」と形容されるのであれば、すがすがしく若々しい歌声であったと思われる。「呉王宮裏人」は夫差に寵愛された美女西施のこと。

この詩は、歴史の変貌と絡ませた春愁の歌である。季節の移ろいに人生のみならず万物の無常を思うのは、洋の東西を問わず文学における不朽のテーマであるが、漢武帝の「秋風辞」のように秋という季節によそえて歌われるのが、おそらく一番判りやすい仕方であろう。しかし人間の感性の複雑さは、万物の生の始まりのときにこそそれを思うという、極めて微妙にしてなお麗しい、精神の振幅を持つのである。

万葉の詩人は、うららかな春日の空にただ一羽舞い上がるヒバリの声に、あるいは夕暮れに鳴くウグイスの声に、己の内なる悲しみを投影させた。その悲しみの由来を問うことはないが、生の季節に死を思う心境があるとすれば、そのパラドックスは鮮烈である。そこには無常感も匂い立つ。

「蘇台覧古」は歴史の流れにおける栄枯盛衰、人為の無常を絡ませている点、いかにも史を重んじる中国風、かつ論理的な設定であるが、そこにすがすがしく若々しい娘等の歌声を配し、さらにはそれをもはやこの世にない西施に対置したのは、やはりある種のパラドックスであるにちがいない。

（漢籍書誌学）